

# 木の言い分⑮

## ■台場クヌギ



昔、女の子が生まれると庭に桐の木を植え、その子が嫁入りの時桐の木を切り、タンスにして持たせたというのは有名な話である。

これに似た風習として、昔の泉州では、女の子が生まれるとツゲの木を植え、嫁入りの時にツゲ櫛にして持たせたり、河内長野市では、嫁入りの時に柿の木の苗を持っていかせたりした。同様に池田では、娘が嫁ぐ時クヌギの苗を持たせ、嫁ぎ先で植えたそうである。

このことからわかるように、昔から池田のある北摂において、クヌギは大切な生活資源だった。

植えたクヌギは大きくなると、地上から1～1.5mのところで切られる。そして切ったところから萌芽した枝を育て、8年位経つとまた同じ所で伐採して炭や薪に利用してきた。この繰り返しで、クヌギは地上から1～1.5mの所はだんだんと、こぶのように大きくなり、こぶの頭からこんもりと細い枝を何本も出している。これを台場クヌギと地元では呼んでいる。

何故地上から1～1.5mのところで切るかという、北摂は昔からシカやウサギの多い所であり、地際で切ると食害にあうから、それを防止するための措置だという説や、下刈の時に萌芽枝を切らずに済むという説、また柴に使うための萌芽枝がたくさん出るという説などいろいろあって、この説が絶対正しいというのは不明らしい。

燃料革命が起きるまでクヌギ林は、薪などの燃料、田畑の肥料、シイタケの原木、そして有名な池田炭の原材料として大いに利用されてきた。

その後、石油等のエネルギー資源や化学肥料が広まるにつれ、クヌギ林は他の広葉樹と同様、見向きもされなくなり、放置されたクヌギ林が目につくようになった。

北摂の山を歩いていると、時々、樹齢100年以上の風格のある台場クヌギを見ることが出来る。それらは、台場の部分が一部腐朽して、幹に空洞が出来ているものが多く目に付くが、上部は立派な幹が何本もすくすくと伸びている。

台場クヌギのたくましさに、自分もこうありたいと思う次第である。